慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | テオドール・フルルノワ『インドから火星へ』：第6章火星の輪廻(続き)：火星語 (2) (翻訳) |
| Sub Title | Théodore Flournoy, Des Indes à la planète Mars : chap. 6 Le cycle martien (suite) : la langue martienne (2) (traduction) |
| Author | 小野, 文(Ono, Aya) |
| Publisher | 慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会 |
| Publication year | 2024 |
| Jtitle | 慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.78 (2024. 3) ,p.39- 58 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20240331-0039 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

この著作物は著作権法によって保護されています／This content is protected by the Japanese Copyright Act 

# テオドール・フルルノワ
# 『インドから火星へ』

## ――第 6 章 火星の輪廻（続き）：火星語（2）（翻訳）――

小　野　　文

（16）antané ésanâle pouzé mêné simandini mirâ
（Astané. Esenale. Pouzé. Amie Simandini, adieu !）
アスタネ。エズナル。プゼ。愛しい人シマンディニ、さようなら！

視覚による。1897 年 8 月 22 日。この文章は、翻訳の必要はなかったのだが、火星語の最初の文字の出現を作りなしている（上掲の図 21 とこの交霊会のレジュメ［原著 p. 181–183］を参照）。

（17）taniré mis mèch med mirivé éziné brimaζ ti tès
*Prends un crayon pour tracer mes paroles de cet*
鉛筆を取って、この瞬間の私の言葉を書き取るのだ。
tensée —— azini dé améir mazi si somé iche nazina
*instant. Alors tu viendras avec moi admirer notre nouveau*
そして、そなたは私と共に、我らの新たな段階に驚嘆することに
tranéï. —— Simandini cé kié mache di pédriné tès luné ké cé
*passage. Simandini, je ne puis te quitter ce jour. Que je*
なるだろう。シマンディニ、この日、私はそなたを離れることができない。
êvé diviné —— patrinès kié nipuné ani

*suis heureux ! -Alors ne crains pas !*
なんと幸せな事か！ 恐れることはない！

文字による。1897 年 9 月 12 日（翻訳は同日の交霊会中）。［原著］p. 160 と p. 184、図 23 を参照のこと。

（18）modé tatinée lâmi mis mirâ ti ché bigâ kâ
*Mère chérie, voici un adieu de ton enfant qui*
愛するお母さん、こんなにもあなたを思っているあなたの子
ébrinié sanâ é vi idé zé rénir ── zé mess métich kâ é
*pense tant à toi. On te le portera, le grand homme qui a*
の最後の別れの言葉です。これをあなたに届けます、細い顔、
zé valini iminé ── niz［é］grani sidiné
*le visage mince et le corps maigre*
痩せた体の偉大な人が。

聴覚と文字によるもの。1897 年 10 月 10 日（翻訳は同日交霊会）。エレーヌは火星の風景のヴィジョンを見るが、そこでは肉体離脱したエズナルが植物のまわりを漂っており、彼が発した上記の言葉をエレーヌが繰り返す。（翻訳の時に分かったことだが、この文章はミルベル夫人に宛てられたもので、夫人はその時分田舎にいたのだが、最後の箇所で非常に明確に示されている人物が、実のところ彼女に会いに行くことになっており、また伝言を言付かることもできたのである）。私はこの時、同じ文章を文字で起こしてもらえればという期待のもと、エレーヌに鉛筆を渡した。かなり躊躇して解明にもったいをつけてから、いや増す夢遊病状態を呈しつつ、エレーヌは意を決して人差し指と中指のあいだに鉛筆を取り、引き続き彼女には見えているエズナルを脇に座らせて彼に話しかけ、そして書き始めたのだった。このとき彼女は全くの放心状態で、紙に魅入られているようだった。左手の人差し指（レオポール）が、これを書いているのはエズナル自身だと教えてくれる。

エズナルに話しかけるために彼女は二度ほど中断した。「あ！まだ行かないで…もうちょっと居てください」彼女は神経質で落ち着きがないように見え、しばしば書くのを止めて鉛筆で紙をつついて跡をつけたり、削除線や殴り書きをしたりした（図 25）。最後の行の zé に関しては、彼女は é を忘れていた（それでエズナルは翻訳の際に、わざわざこの語を正しく発音したのだった）。文章が出来上がると、彼女は半分覚醒し、私を認め、しばらく私とおしゃべりしたあと、別の夢に滑り込んでいった。

（19）m［en］cé kié mache di trine sandiné téri
*(A.mie, je ne puis te parler longtemps comme*
愛しい人、そなたに長い間は話せない、私の
né êzi vraïni zou réch mirâ milé piri mirâ
*est mon désir; plus tard, adieu adieu.)*
望み通りには。また後で、さようなら、さようなら。

文字、次いで聴覚によるもの。1897 年 10 月 24 日（この文章にはこれまで翻訳はなく、うち二語に関しては意味不明）。――エレーヌはまず緑色の光に照らされたテーブルを見るが、そこに線描があり、彼女は書き写す。それがこの文章であるが、最初の語の終わり二文字は、写せずに空欄になっている。そのあとすぐ、彼女は火星語を聞き、それを繰り返す。それは同じ文章で、最初の語もまるごと繰り返されていた。そして彼女はアスタネ、エズナル、そして幼い娘で名前をニケと聞き取れた子のヴィジョンを見る。しかし、これらすべては、まもなく火星ではない別の夢遊症に取って代わられるのである。

（20）Siké évaï divine zé niké crizi capri né amé
*Siké, sois heureux I Le petit oiseau noir est venu*
シケ、幸いあれ！黒い小鳥は昨日私の窓を
orié antéch é êzé carimi ni êzi érié é nié pavinée hed

*frapper hier à ma fenêtre et mon âme a été joyeuse ; il*
叩きに来た、そして私の魂は喜びでいっぱいだった。鳥は
lé sadri dé zé véchir tiziné Matêmi misaïmé kâ lé
*me chanta : tu le verras demain. - Matêmi, fleur qui me*
私に歌った：そなたは彼に明日会う。――マテーミ、私を生かす
umèz essaté Arvâ ti éziné udâniζ amès tès uri amès
*fais vivre, soleil de mes songes, viens ce soir, viens*
花よ、わたしの思いの太陽よ、今晩来なさい、来て
sandiné ten ti si évaï divinée Romé va né Siké
*longtemps près de moi ; sois heureuse! - Romé, où est Siké?*
私のもとに長く居なさい。幸いあれ！――ロメ、シケはどこだい？
- atrizi ten té taméch épizi
*Là-bas, près du « tamèche » rose.*
――あそこ、バラ色の「タメッシュ」の近くに。

聴覚、次に文字による。1897年11月28日（同日交霊会中に翻訳）。［原著］169頁に記述がある火星のお祭りのヴィジョンのあいだに聞かれた会話の断片。シケ（若い男性）とマテーミ（若い女性）が最初に対になって現れ、そして赤い花の咲く大きな灌木（タメッシュ）の方に離れていったが、一方で、二番目の対の人物の言葉が文章の最後の数行に現れており、前のカップルに合流しようとしている。――彼女はこのヴィジョンを立ったままで、大きな身振りをともなって描写したが、その後でエレーヌは椅子に座り、同じ火星語の文章を書き始めた。レオポールは私たちに、彼女の手を使っているのはアスタネだと知らせてくれる［親指と人差し指のあいだに鉛筆を挟んで、つまりはレオポールのやりかたであって、以前文章17で見せたように、エレーヌの持ち方でではない］。スミス嬢はこの作業のあいだ、まずは完全に没頭して感覚が麻痺しているように見えた。しかしながら、交霊会参加者数人の会話が少し彼女の邪魔をしたらしく、レオポールはついには静かにさせようとテーブルを左手の拳で乱暴に三回叩くことまでする。その後、文字は

より早く書かれるようになる（平均して一分間に 12 文字）。書くことが終わると、レオポールは翻訳の場を作るため、エレーヌをソファに座らせるように指示する。

（21）véchêsi tésée polluni avè métiche é vi ti
*Voyons cette question, vieux［sic］ homme; à toi de*
この問いを見てみよう、ご老人よ。探究し、
bounié seïmiré ni triné
*chercher, comprendre et parler.*
理解し、話すのはそなただ。

聴覚によるもの。1898 年 1 月 15 日（翻訳は 2 月 13 日）。――目覚めているときのヴィジョンのなかで垣間見られた、火星の二人の人物のあいだで行われた会話の断片。

（22）astané cé amès é vi chée brimi messé téri
*Astané, je viens à toi; ta sagesse grande comme*
アスタネ、あなたのところに参りました。あなたの大いなる知恵は
ché pocrimé lé…
*ton savoir me...*
私を…

聴覚によるもの。1898 年 1 月 25 日頃（翻訳は 2 月 13 日）。――朝の 6 時に見たヴィジョンで、そのなかで若い火星人の娘［マテーミか？］は山を貫通するトンネルを通り抜けてアスタネの家に着き、彼に上記の言葉をかけ、また他のもっと多くの言葉もかけるのだが、エレーヌはメモできるほどはっきりとは聞き取れなかった。

（23）［A］paniné évaï kirimé zé miza ami grini

*Paniné sois prudent, le « miza » va soulever ;*
パニネ、気を付けて、「ミザ」が飛び立つよ
ké chée émécher ès pazé ――［B］pouzé tès luné soumini
*que la main se retire! - Pouzé, ce jour riant...*
手を引っ込めて！――プゼ、この笑いの日…
arvâ ii cen zé primi ti ché shiré kiz pavi luné ――
*Arva si beau... le revoir de ton fils... quel heureux jour -*
アルヴァはこんなにも美しく…君の息子に再会…なんて幸せな日…
［C］saïné êzi chiré izê linéï kizé pavi êzi mané
*Saïné, mon fils, enfin debout! quelle joie!... Mon père*
サイネ、息子よ、ようやく立ち上がったね！何という喜び！…父よ
ni êzé modé tiziné êzi chiré êzi mané cé êvé adi
*et ma mère... Demain, mon fils... Mon père, je suis bien*
母よ… 息子よ、明日… 父よ、体調はいいのです、
anâ
*maintenant.*
今は。

聴覚によるもの。1898 年 2 月 20 日（同日の交霊会中に翻訳）。――非常に複雑な火星のヴィジョン。まず転がる三つの小さな家が見えるが、これは中国風のあずま屋が小さな玉の上で動いているようなもの。そのうちの一つのなかに、見知らぬ二人の人物がおり、一人は楕円形の窓から手を出している。それがもう一人の人物の注意を引いて、最初の文章［A］が発せられる。この時、じっさいにこの回転するあずま屋（miza）はバランスをとるように動き、それがチクタクという音を立て、それからレールの上を走る列車のように滑り出す。バラ色の高い山を迂回して、素晴らしい峡谷というか園谷のようなところに到着する。その勾配は見たこともない植物でおおわれており、そこにピロティに似た格子桁のうえに白い家々がある。その時、二人の男性が話しながら彼らのミザ（miza）から出るが、エレーヌは彼らの会話

の僅かな断片［B］しか捉えられない。二人のところに 16–7 歳ぐらいの若い男性がやって来る。彼はナイトキャップのように、頭の左側をてっぺんまでバンドで巻いている。火星の挨拶：彼らは互いに頭を手でなで合うなどする。エレーヌは、彼らの言うことが非常に不明瞭にしか聞こえないと訴え、繰り返すことができたのは文章の切れ端［C］だけだった。彼女は気分が悪くなり、レオポールは左手の人差し指で「彼女を眠らせよ」と私に指示してくる。そうしてしばらくするといつものシーンとなり、語が一語ずつ繰り返され、文章が翻訳される。

（24）saïné êzi chiré iée êzé pavi ché vinâ ine ruzzi
*Saïné mon fils, toute ma joie, ton retour au milieu*
サイネ、私の息子、私の喜びよ、お前が私たちの
ti nini né mis mess assilé atimi… itèche…
*de nous est un grand, immense bonheur... toujours*
なかに帰ってきたことは、大きな計り知れない幸せ…いつも
furumir… nori
*aimera... jamais.*
愛するだろう…いつまでも

聴覚によるもの。1898 年 3 月 11 日。――「昨日の朝（とエレーヌは私にこの文章を書いて寄こした）、私は火星のヴィジョンを目にしました。このあいだ垣間見たもの［2 月 20 日の会］とほぼ同じものです。私はまたもや回転するあずま屋、格子の上の家々、複数の人々を見ましたが、そのなかの一人の若い男性は、頭の片側にしか髪の毛がありませんでした。この人は、周りの他の男性たちに何かを調べてもらっていました。幾つかの言葉を記すことができました。しっかり聞き取るのはかなり難しく、かなり不明慮で、最後の部分などは、かろうじて私の耳に届いたもののなかからあちこち拾い集めた具合です…」

（25）dé véchi ké ti éfi mervé éni

*Tu vois que de choses superbes ici.*

ここにある素晴らしきものが見えるだろう。

聴覚によるもの。1898 年 8 月 21 日（同日の交霊会中に翻訳）。――目覚めた状態でのヴィジョンで、バラ色の二つの山の間を流れる川と、橋（図 9 に近いもの）を見るが、この橋は水のなかまで下がって、5–6 隻の船（図 13 の船のようなもの）を通すために隠れ、また現れる。エレーヌがこれら全てを感嘆しながら描写するため、彼女は上のような火星語の声を聴くのである。

（26）Astané né zé ten ti vi

*Astané est là près de toi.*

アスタネは、そこに、そなたの近くにいる。

視覚による。1898 年 8 月 21 日（同日の会中に翻訳）。――先のシーンの続き。エレーヌは、火星のヴィジョンの輝く赤い空中に、見知らぬ文字を見て、それをデッサンとして複写する（図 26 参照）。私は彼女に zé の語（そのほかのところでは全て（定冠詞の）「le」を意味する）を示しながら、彼女が間違っていないか訊ねる。彼女は、目前に、少し高いところに想像上のものとして見えているモデルと自分の書いた文字とを慎重に比較しながら確認し、これで正しいと確信をもって言う。

（27）siké kiz crizi hantiné hed é ebrinié rès amêré é

*Siké, quel oiseau fidèle! il a pensé se réunir à*

シケ、なんと忠実な鳥！ この鳥は私たちのところに来ようと、

nini éssaté ti iche atimi matêmi hantiné hed né

*nous, vivre de notre bonheur! - Matêmi fidèle, il est*

私たちと幸せを共にしようと考えていた！――誠実なマテーミ、私の心

は
hantiné êi darié siké tès ousti ké zé badêni lassuné
*fidèle mon cœur! - Siké, ce bateau que le vent approche*
忠実だ！――シケ、強い風が近づけているこの船は
mazi trimazi hed éti zi mazêté é proviné é nini zé priâni
*avec force! il a de la peine à arriver à nous; le flot*
ちょうど私たちのところに来たばかりね。今日は波の動きが
é fouminé ivraïni idé é ti zi mazêté é vizêné zé chodé
*est puissant aujourd'hui,· on a de la peine à distinguer le « chodé ».*
強い。「ショデ」を見極めるのに苦労するわ。

聴覚によるもの。1898 年 9 月 4 日ごろ（翻訳は 10 月 16 日）。――エレーヌは、二人の若い火星人が花壇のようなところの中を散歩しつつ、図 13 に見るような船が到着するのを眺めているヴィジョンを見るのと同時にこの文章を聞き、そして書き取る。――「ショデ」が何を意味するのかは知ることができなかった。

（28）men mess Astané cé amès é vi itéch li tès
*Ami grand Astané, je viens à toi toujours par cet*
友、偉大なアスタネよ、私はあなたのところにいつも
alizé néümi assilé kâ ianiné êzi atèv ni lé
*élément mystérieux, immense, qui enveloppe mon être et me*
この神秘的で巨大なもの、私の存在を包み、私の思いと要求から
tazié é vi med iéeζ éziné rabriζ ni tibraζ, men amès di
*lance à toi pour toutes mes pensées et besoins. Ami, viens te*
私をあなたのもとに投げ出すこのモノによって来る。友よ、
ouradé ké Matêmi uzénir chée kida, ni ké chée brizi pi
*souvenir que Matèmi attendra ta faveur, et que ta sagesse lui*
マテーミがあなたの好意を待ち望んでいること、あなたの知恵が彼女に

dézanir. évaï diviné tès luné.
*répondra. Sois heureux ce jour.*
応えてくれるのだと思い出してください。幸あれ。

視覚によるもの。1898 年 10 月 3 日（翻訳は 10 月 16 日）。夜の 8 時 45 分、スミス嬢は彼女自身と彼女の母親のためにレオポールとの交信を得ようとして肘掛け椅子に座り、瞑想する。程なくして彼女は、今晩は現れることができないが、興味深く重要な何かが準備されている、と語るレオポールの声を聞く。寝室がまもなくすると完全に暗くなったように彼女には感じられるが、机の端だけは別で、そこだけは金色の光で輝いているのが見出せるのだった。黄色いドレスと長い三つ編みをした若い火星人の娘が、エレーヌの隣に座りにきて、インクも鉛筆もなしに、人差し指の先端で、白いシリンダーに黒い跡を残すが、そのシリンダーは最初は机の上に置かれており、次に彼女の膝の上に移り、彼女が書くにつれて転がっていくのである。エレーヌはこれらの文字をよく見てそれを紙の上に鉛筆でコピーする準備ができていた（図 27 を参照）。その後、ヴィジョンは消えていき、彼女には母親の寝室が再び現れてくるのを見る。エレーヌは「数字の 2 や 7 に似た」これらの文字が何を意味するのか知らず、また当初のシリンダーに書かれたものは、彼女がコピーしたものより小さく、またはっきりしていたと言う。彼女はいつもの習慣で鉛筆を人差し指と中指の間に持っており、またこの間ずっと、この若い娘の存在に魅惑されていたとはいえ、完全に目覚めた状態でいたつもりだった。だがエレーヌの母は、この自動書記の場面に居合わせたのだが、「誰がエレーヌに書かせている、だって彼女はおかしな雰囲気で、鉛筆でちょっと書いては、左手の人差し指で行をなぞっている」などと考えた。

（29）sazêni kiché nipunézé dodé né pit léziré bèz
*Sazeni pourquoi craindre? Ceci est sans souffrance ni*
サザミ、なぜ恐れているのか？これには苦しみも危険も
neura évaï dastrée firêzi zé bodri né dorimé zé

*danger, sois paisible; certainement le os est sain, le*
ない、平安であれ。きっと骨は無事で、血
pastri tuvré né tuzé
*sang seul est malade.*
だけが病気なのだ。

聴覚による。1898 年 10 月 14 日（翻訳は 10 月 16 日）。――朝に見たヴィジョンで、見知らぬ一人の男性と一人の婦人がおり、この婦人は赤いシミのついた腕に、三つのチューブの付いた器具を取り付けられており、この器具は、壁に固定された板の上に置かれている。これらの言葉は男性が発したもので、婦人は何も言わない。

（30）mode ké hed oné chandêné têsé mûné ten ti
*Mère, que ils sont délicieux ces moments près de*
お母さん、なんと甘美な時でしょう、あなたの傍に
vi bigâ va bindié idé ti zâné tensée zou rèche
*toi! - Enfant, où trouve on de meilleurs instants? plus tard*
いるのは！――娘よ、これ以上の時がありますか？　このあと
med ché atèv kiz fouminé zati
*pour ton être quel puissant souvenir.*
そなた自身にとって、これほど強い思い出は。

聴覚による。1898 年 10 月 22 日（翻訳は 12 月 18 日）。
朝の 6 時 15 分。砂浜のヴィジョン、赤みを帯びた土地。広大な水面の拡がり、青みがかった緑の美しい水。二人の女性がそこにいて、隣あって歩いています。これが私の把握できた彼女たちの会話の全てです。

（31）Râmié bisti ti Espênié ché dimé ûni zi
*Ramié habitant de Espénié, ton semblable par la*

エスペニエの住人であるラミエ、そなたに
trimazi tié vadâzâζ di anizié bana miraζ Ramié di
*force des « vadazas » te envoie trois adieux. Ramié te*
似た者が「vadazas」の力によって三たび別れを送る。ラミエはそなたに
trinir tié touma ti bé animinâ ni tiche di uzir nâmi
*parlera des charmes de sa existence et bientôt te dira*
その存在の魅力を話すだろう、また程なくエスペニエに関して多くを
ti Espênié. évaï divinée.
*de Espénié. Sois heureuse!*
語るだろう。幸あれ！

文字によるもの。1898 年 10 月 27 日（翻訳は 12 月 18 日）。

12 時 50 分。ヴィジョンは全くないのに、右腕に強い痙攣があり、何かが私を紙と鉛筆へと向かわせました。何を、なぜかも分からず、私は書いています。

［二ヶ月後に得られた翻訳から、これがラミエと、それから何日か後に出てくる火星を超えたヴィジョンの最初の現れだったと知ることができる。］図 28 を参照。——vadazas という語は、これまで説明されたことはないが、火星語らしくなく、インドの輪廻から借りられたもののように見える。エスペニエに関しては文章 6 を参照のこと。

（32）anâ évaï maniké é bétiné mis tié attanâ
*Maintenant sois attentive à regarder un des mondes*
今や、そなたを取り囲む諸世界の一つを見るため
kâ di médinié bétinié tès tapié ni bée atèv kavivé
*qui te entourent. Regarde ce « tapié » et ses êtres étranges.*
注意深くあれ。この「タピエ」とそこの不思議な存在を見るがよい。
danda anâ.

*Silence maintenant!*
今は、黙って。

聴覚による。1898 年 11 月 2 日（翻訳は 12 月 18 日）。――エレーヌは朝のヴィジョンで一人の火星人［ラミエ］が彼女に腕を廻し、もう一方の手で、これらの言葉を言いながら、不思議な絵（タピエ）を示すのを見る。この絵のなかでは摩訶不思議な存在が次のような見知らぬ言語の文章を話している。このヴィジョンが消え去るとき、エレーヌは自分でも気付かずに 34 の文章を書いた。（より詳細な報告は、次の超火星語の章を参照せよ）。

（33）BAK　SANAK　TOP　ANOS　SIK
sirima　nêbé　viniâ-ti-mis-métiche　ivré　toué
r*ameau vert nom de un homme sacré dans*
小枝　緑の　男性の名前　聖なる　の中に
ÉTIP　VANE　SANIM　BATAM ISSEM TANAK
viniâ-ti-misé-bigâ　azâni　maprinié　imizi　kramâ　ziné
*nom de une enfant mal entré sous panier bleu*
女の子の名前　よくない　入った　の下に　カゴ　青い
VANEM　SÉBIM　MAZAK　TATAK　SAKAM
viniâ-ti-mis-zaki　datrinié　tuzé　vâmé　gâmié
*nom de un animal caché malade triste pleure.*
動物の名前　隠れた　病気の　悲しい　泣く

火星語でない文章は聴覚による（次章を参照）。これはエレーヌが 11 月 2 日に先のヴィジョンの絵のなかの不思議な存在が発するのを聞いた文章である。この文章の火星語の翻訳は発声によるもので、これはアスタネ（エレーヌに憑依し、彼女の口から見知らぬ言語を話し、各々の語の火星語における対応語がそれに続いた）によって 1898 年 12 月 18 日の交霊会で与えられた。その後すぐ、アスタネはエズナルに場所を譲り、そのエズナルは火星語の文

章を繰り返しながら、それを一語一語、いつものやり方でフランス語に翻訳した。

（34）Ramié di pédrinié anâ né ériné diviné
*Ramié te quitte maintenant, est satis/ait, heureux*
ラミエは今やそなたを離れる、彼はそなたの近くに
té mûné ten ti vi. hed dassinié mis abadâ ti ché
*du moment près de toi. Il garde un peu de ton*
いて幸せで、満たされていた。彼はそなたの存在を
atèv ni di parêzié banà mirâζ —— évaï divinée.
*être et te laisse trois adieux. Sois heureuse!*
少しばかり保ち、そして三たび別れを告げる。幸あれ！

文字によるもの。1898 年 11 月 2 日（翻訳は 12 月 28 日）。——エレーヌは彼女の手が「しっかり摑まれている」のを感じていたが、先のヴィジョンの終わりに、この文章を記していたのを後になって知った。——図 29 参照。

（35）［A］Attanâ zabiné pi ten té cihe tarvini mabûré
*Monde arriéré, très près du nôtre, langage grossier,*
私たちのところに非常に近い、旧弊な世界、粗雑なことば、
nubé téri zée atêv ［B］Astané êzi dabé fouminé ni
*curieux comme les êtres! -Astané, mon maître puissant et*
興味深い存在よ！——アスタネ、力強く権威ある私の師、
ié ti takâ tubré né bibé ti zé umêzé
*tout de pouvoir, seul est capable de le faire.*
彼のみがこれを可能にできる。

聴覚によるもの。1898 年 12 月 5 日（翻訳は 12 月 18 日）。——朝の 7 時にランプの明かりで仕事をしながら、エレーヌは新たに火星人のヴィジョン

（ラミエ）を見たが、彼はエレーヌの腰に手を回し、もう一方の手で何かを示す身振りをしてみせながら（おそらく先のヴィジョンの絵であろうが、エレーヌはそれが現れるのを見なかった）、最初の文章［A］を発する。次の文章［B］は、先日のふしぎなことばを翻訳してほしいというエレーヌの心の問いに応える、この同じ火星人の返答である。［最初の文章も、それについての彼女の心の問いに答えたものであると彼女は理解したに違いない。］

（36）［A］aé aé aé aé lassunié lâmi rêzé aé aé aé
*Aé, aé, aé, aé! -Approche; voici Rêzé... aé, aé, aé,*
おーいおい！――近づいて。これがレーゼ…おーいおい、
aé niké bulié va né ozâmié zitêni primêni ――［B］ozâmié
*aé, petit Bulié... où est Ozamié? Zitêni, Primêni... Ozamié,*
小さなブリエ… オザミエはどこ？　ズィテーミ、プリメーニ… オザミエは
viniâ ti mis bigâ kémâ zitêni viniâ ti misé bigâ kémisi
*nom de un enfant mâle; Zitêni, nom de une enfant femelle;*
男の子の名前。ズィテーミは、女の子の名前。
primêni viniâ ti misé bigâ kémisi.
*Primêni, nom de une enfant femelle.*
プリメーニは女の子の名前。

聴覚によるもの。1899 年 3 月 8 日（翻訳は 6 月 4 日）。――エレーヌは、以下に記述されているようなヴィジョンのなかで、文章［A］を聞いた。これが翻訳されるとき、会の参加者たちは、すぐには三つの単語が固有名詞だと分からなかったため、エズナルはフランス語の意味を添えて文章［B］を付け加えた。

私は昨晩、眠れませんでした。11 時半に、とつぜん私の周りが明るくなり、そしてこの眩しい光が廻りのものを判別できるようにしてくれま

した。今朝起きて、非常に正確に、その時見たものを思い出しています。この光のなかに、一つの絵が形をとり、そのうち火星の家の屋内しか見えなくなりました。広い真四角の部屋、まわりには棚が固定されていて、いえむしろ、小さなテーブルが壁に固定されていると言ったほうがいいでしょう。これらの縁つきテーブルにはそれぞれ赤ちゃんが入っていましたが、全く産着でくるまれてはいませんでした。この小さな子どもたちの動きはまるで自由で、体の上に小さなリネンがかけてあるだけでした。彼らはまるで黄色っぽい苔のうえに寝かされているようでした。これらのテーブルが何でおおわれていたのか、私は決して理解することがないでしょう。不思議な動物をつれた男性たちがこの部屋のなかを歩き回っていました。この動物は、ほとんど毛のない平べったい頭に、ほとんどアザラシのような非常に優しい大きな目を持っていました。軽く毛のはえた体は、私たちの国の牝鹿に似ていましたが、幅広くて平べったい尾だけは別です。動物は大きな乳房を持っていて、そこにいる人たちはこれに四角い道具を取り付けていましたが、これには管が付いており、それぞれ子どもに向けられていたので、この動物の乳によって子供たちが哺乳されているのだとすっかり分かりました。私には呼び声や大きなざわめきが聞こえていたので、［この文章の］いくつかの言葉をなんとかして書き取ったのです。残りは、はっきり聞こえにくくなってきたので、書くのを諦めました。このヴィジョンはおおよそ 15 分ぐらい続きました。そして徐々に消えていき、私がようやく深い眠りについたのは真夜中ぐらいだったと思います。

（37）Astané bounié zé buzi ti di trine nâmi ni
*Astané cherche le moyen de te parler beaucoup et*
アスタネはそなたに多くを話す手段を、また
ti di umêzé séïmiré bi tarvini
*de te faire comprendre son langage.*
彼のことばを理解させられるような手段を探している。

文字によるもの。1899 年 3 月 24 日（翻訳は 6 月 4 日）。

朝の 6 時半。アスタネのヴィジョン。私は立ってスリッパをはこうとしていました。彼は私に話しかけますが、それが私には理解できません。私はこの紙と鉛筆を取りました。彼はもう話しかけずに、鉛筆を握った私の右手を専有しました。この圧力で私は書いています。私には何やら全く理解できず、まるでヘブライ語みたいです。手から力が抜けたので、アスタネを見ようと頭を挙げましたが、彼はすでに消えていました（図 30 参照）。

（38）fédié amès Ramié di uzénir tès luné amè zé

*Fédié, viens; Ramié te attendra ce jour; viens, le*

フェディエ、こちらにおいで。この日、ラミエがお前を待っている。おいで、

boua trinir

*frère parlera.*

兄弟が話すよ。

視覚によるもの。1899 年 3 月 30 日（6 月 4 日）。――夜の 9 時 15 分、寝に行くまえに化粧台の椅子に座っていると、エレーヌは突然、バラ色の霧に包まれ、家具の一部分も隠されたが、そののち霧は消散し、自分の寝室の奥に「壁に付いたバラ色の球体によって照らされた奇妙な部屋」が見えてくる。もっと彼女の近くには、空中に浮いたテーブルと、火星人の服を着て、槍状のものの上に座った男性の姿が見えてくるが、彼は人差し指に固定された釘のようなもので書いている。

私はこの男性のほうに身を傾けました。私はこの想像上のテーブルに左手を載せようとしたのですが、私の手は宙にだらりと落ち、元の化粧台に手を置くのにかなり骨折りました。私の手はこわばったようになり、しばらくの間はほとんど力が入りませんでした。

幸いにも、引き出しのなかの鉛筆と紙を取って写そうという考えが彼女の頭に浮かんだ。

私は、何度も見たことがあるこの火星人の男性［ラミエ］が書いたばかりの文字を写そうとしたのです。これは本当に大変でしたが――というのも彼の文字は私が書き取ったものよりずっと小さかったからです――なんとか再現しました［図 31 の火星語の文章］。全てはおよそ 15 分のあいだ続きましたが、その後私はベッドに入り、その夜はもう何も見ませんでしたし、翌日も同様でした。

（39）Ramié pondé acâmi andélir téri antéch
*Ramié, savant astronome, apparaîtra comme hier*
ラミエ、あの天文学者が、昨日のように現れるだろう、
iri é vi anâ. riz vi banâ miras ti Ramié ni
*souvent à toi maintenant. Sur toi trois adieux de Ramié et*
いまや頻繁にそなたのもとに。ラミエとアスタネから三度の
Astané. évaï divinée.
*Astané. Sois heureuse!*
別れを。幸あれ！

文字によるもの。1899 年 4 月 1 日（翻訳は 6 月 4 日）。

10 時 5 分、またベッドに入ろうとしているときです。一昨日の人物の新しいヴィジョンです。彼が話し出すと思いましたが、彼の口からは何の音も出てきません。私はすばやく鉛筆と紙を取りましたが、右腕が彼に摑まれるのを感じ、ここに書いた［図 32］奇妙な文字を書き写し始めました。彼は非常に愛情深い人です。彼の物腰、視線といった全てに、彼の良さと、同時に風変わりな様子がにじみ出ています。彼は私をうっとりさせたまま、私の元を去りましたが、本当に短い時間でした。

（40）ramié ébanâ dizênâ zivênié ni bi vraïni
*Ramié, lentement, profondément, étudie, et son désir*
ラミエは、ゆっくり、深く、探究しており、そして彼の広大な望みは
assilé né ten ti rès kalâmé astané êzi dabé né zi
*immense est près de se accomplir. Astané mon maître est là*
もうすぐ完遂するところだ。私の師アスタネは、私を助け、
med lé godané ni ankoné évaï banâ zizazi divinée
*pour me aider et réjouir. Sois trois fois heureuse !*
喜ばせるためにそこにいる。三たび幸せであれ！

聴覚による。1899 年 6 月 4 日（同日の交霊会中に翻訳）。――半夢遊状態で、エレーヌは、ヴィジョンはないまま不明瞭な響きの声を聴くが、その声は彼女に言葉をかけ、その中の幾つかである上記の文章を彼女はかろうじて聞き取った。

（41）これらの文章と呼べるものに付け加えて、別な機会に収集できた孤立語を紹介しておくのが適当だろう。以下に挙げるこれらの語の意味は、十分な確実さでもって、それを取り囲むフランス語の文脈から、またそれが指示する物体をエレーヌが記述したところから、推測できる。chèke「紙」、chinit「指輪」、asnète「屏風のようなもの」、Anini Nikaïné は少女の名前（［原著］160 頁参照）、これはおそらくエズナルの火星における妹で、彼の周りを漂っており、エレーヌには見えないのだが、病気だったあいだ守護霊のように彼女を見守っていた。ベニエル（Béniel）、これは火星から見える私たちの地球の名前である（ちなみに火星のほうは、文章 7 と 9 ではデュレ（Durée）と呼ばれている）。

［後半に続く］

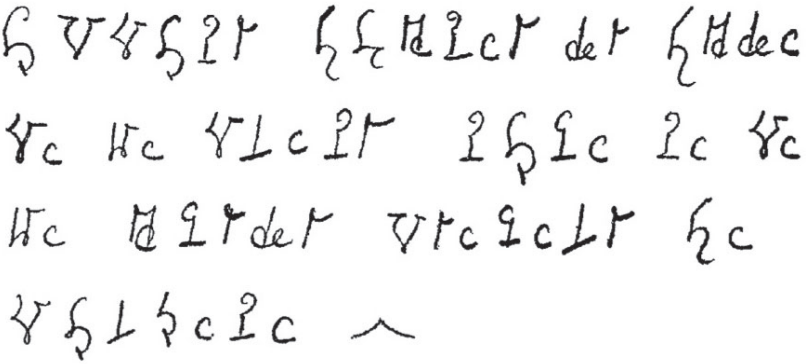

**図 30**

文章 37（1899 年 3 月 24 日）、アスタネの憑依したスミス嬢によって書かれたもの［ルメートル氏のコレクション］。――現物大。写真ネガの不具合で、最初の文字には点が欠けている。